

# 2017冬期 募金に ご協力ください


 医療を通じて、愛を世界へ。  
 公益社団法人  
**日本キリスト教海外医療協力会**  
 JAPAN OVERSEAS CHRISTIAN MEDICAL COOPERATIVE SERVICE

1960年、日本で最初の  
 民間国際協力団体のひとつとして、  
 JOCSは設立されました。  
 日本がアジアの人々に対して  
 犯した戦争への深い反省に立ち、  
 和解と平和の実現を願いながら  
 今日まで保健医療活動を続けてきました。  
 国や宗教の違いをこえて  
 世界の人々と共に生きるために、  
 JOCSをお支えください。



岩村昇元ワーカー(ネパール派遣 1962~80年)

ご支援  
くださっている  
方々の声

**地** 道にやるべきことを黙々とこなしている  
JOCSに心を惹かれます。貧者の一灯  
のような支援ですが、生きている間は続けたい  
です。(50代 E・Mさん)

**私** は戦中・戦後の苦しみ  
を経験しました。新聞で  
JOCSのことを知り支援するよう  
になりました。(80代 N・Eさん)

## ご寄付・ご入会の方法

### 郵便振替

ゆうちょ銀行  
口座：日本キリスト教海外医療協力会 募金部  
00170-3-13986

### 銀行振込

三井住友銀行 高田馬場支店  
日本キリスト教海外医療協力会  
口座番号：普通 4186361  
\*お名前とご連絡先を事務局までお知らせください。

### クレジットカード

月々 500 円からご支援いただけます。  
ホームページ (www.jocs.or.jp) からお申し込みください。

\*銀行・ゆうちょ銀行口座からの口座振替(月々又は年払)もご利用いただけます。事務局へお申し込みください。  
\*当会へのご寄付・一般会員の会費は、特定寄付金に該当し、寄付金控除を受けられます。  
\*当会へのご寄付は9割が事業費、1割が管理費として、会費は5割が事業費、5割が管理費として使われます。

## JOCS 役員 (五十音順)

- |      |   |
|------|---|
| 会 長  | 畑野研太郎 (医師)  |
| 常務理事 | 大友宣 (医師)  |
| 理 事  | 植松功 (自営) 小宅泰郎 (医師) 久保礼子 (言語聴覚士) 土居弘幸 (大学教員) 名取智子 (JOCS事務局次長) 榛木恵子 (団体役員) 東岡牧 (看護師) 森田隆 (JOCS事務局長) |
| 監 事  | 倉辻忠俊 (医師) 渡部芳彦 (歯科医師、大学教員)  |

## ご入会のお願

ぜひ会員として継続的にお支えください。

### 会員種別

- 一般会員** JOCSの活動を支える会員。総会の議決権や理事の選挙権、被選挙権はありません。
- 社員会員** JOCSを構成する会員。総会の議決権、また理事の選挙権及び被選挙権をもちます。

会員になると、会報誌「みんなで生きる」をお届けするほか、活動報告会・イベントなどをご案内します。

### 入会方法

同封の払込票の「一般会員になります」または「社員会員になります」にを記入ください。

**個人情報の取り扱いについて**  
当会は、皆様の個人情報を厳重に管理・保護するとともに、その取り扱いにつきまして「個人情報の保護に関する法律」及び関連する法令その他の規範を遵守し、プライバシーの保護を行っています。詳しくはJOCSホームページの「個人情報の取り扱いについて」(www.jocs.or.jp/privacy)をご覧ください。

## 公益社団法人 日本キリスト教海外医療協力会

ホームページ [www.jocs.or.jp](http://www.jocs.or.jp)

- |       |   |
|-------|---|
| 東京事務局 | 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-51<br>電話：03-3208-2416 FAX:03-3232-6922            |
| 関西事務局 | 〒530-0013 大阪府大阪市北区茶屋町 2-30<br>大阪聖パウロ教会 3階<br>電話：06-6359-7277 FAX:06-6359-7278 |



わたしが  
あなたが  
あなたを  
愛した  
ように、  
互いに  
愛し合  
いなさい。

ヨハネによる福音書 13章34節

山内章子ワーカーが指導した理学療法技術者のリリイさん (バングラデシュ)



## 「自分は価値のある人間なのだ」と気づいてから、女性たちの人生が変わりました

Bangladesh派遣ワーカー（理学療法士） 山内 章子

Bangladeshの首都ダッカから北へ100km、マイメンシンの街に「モヒラクラブ」はある。「モヒラ」とはベンガル語で「女性」のこと。モヒラクラブは、障がいを持つ女性たちの集まりである。ここには、現在約100名の女性たちが名を連ねている。ある女性は刺しゅうをし、ある女性はカーペットを織り、またある女性はミシンでバッグや服を作る。女性たちは、集いの場として、また職場としてモヒラクラブに集まってくる。

モヒラクラブの女性たちの多くは、子どものころに学校で教育を受けた経験が乏しい。親たちはこう思ったのだろう、「障がいを持っていて、しかも女の子では学校に行かせても何の役にもたない、お金と時間の無駄だ」

と。だからモヒラクラブには自分の名前がようやく書けるくらいの人が多い。教育だけでなく、女性たちは、受けてきた差別や不条理は自分たちの障がいのせいだと長く自虐的にとらえさせられてきた。自分に価値を見出すことができずにいた。モヒラクラブとの出会いが、ここに集うすべての女性を、深い闇の淵から明るい日の光が射すところへと導いた。「自分は価値ある人間なのだ」という気づきは、どれほど皆の人生を大きく変えていることか。



このモヒラクラブに一人の女性がいる。名前をドリーさんという。ドリーさんは背中が曲がっていて、体がとても小さい。ドリーさんは、読み書きや簡単な計算はできるので、生活には困らないけれども、複雑なことを理解するのは少し難しい。モヒラクラブでの役割は皆を手伝うこと。皆の仕事部屋を掃除し、皆のためにお茶を入れ、歩行が難しい女性たちの杖となっていて一緒に歩く。ドリーさんはたくさんの責任を担っていて、一日中小さな体でくるくると働いている。

一生懸命に働くドリーさんを、皆、頼りにしている。

ドリーさんは、モヒラクラブに来るようになる前、3人のお兄さんたちから虐待を受けていた。小間使いのように働かされ、寒い日も外のベランダに座らせられた。両親

はよい人だったが、ドリーさんを守れなかった。ドリーさんがモヒラクラブに集うようになってからもそれは続いていた。そのうちモヒラクラブに集う人が増え、仕事の内容も多様になり、ドリーさんは役割をもって仕事ができるようになった。お兄さんたちは皆家を出て行ったが、ドリーさんは自分のわずかな収入で両親を養うことができた。今まで虐（いじ）められて小さく暮らしてきたドリーさんは、家族を支える大きな存在となった。



ドリーさんのお母さんは数年前に心臓の病気がもとで亡くなり、家族は今や高齢のお父さんだけ。お父さんも肺の病気を患っていて、自分の身の回りのことしかできない。だからドリーさんは、モヒラクラブで一日中働いた後、家に帰ってお父さんのために、洗濯から買い物、食事の支度まで、家の仕事を一人でこなす。

ドリーさんはものすごく疲れている時がある。その時は、浅くて速い肩呼吸をして、声も小さくなってしまふ。それを見てわたしたちはとても不安になる。ドリーさんが消えていなくなってしまうのではないかと思えるからだ。ドリーさんの調子が悪いと皆が心配して、どうか仕事をしないで、と口々に頼む。でも、ドリーさんはそんな時とても頑固で、はあはあと息をしながら、任された仕事をやり通してしまう。はたから見たら、ドリーさんの仕事は誰でも代われる、技術を必

要としない仕事かもしれない。しかしドリーさんがそのようにがんばって働いている時、誰も代わることができない。代わってはいけないのだ。

ドリーさんの姿は、いつもわたしにこう投げかける。弱い人は価値がないのでしょうか、知識を持っていない人はダメなののでしょうか。自分の持っているもので人を助けたらいいでしょう、持っていないものまで持っているふりをしてがんばる必要はないでしょう、と。

だから、わたしはここで、女性たち一人ひとりが自立するためではなく、助け合いながら皆で立つことができるよう、それぞれの可能性が伸びるように支えたいと思う。どの仕事をしている人も、それを役割として互いに尊敬しあえるように。

どうか、このような女性たちの歩みをご支援ください。